

地方出版
情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

「ブックインとっとり」受賞の旅

地方出版でもう少し頑張るのも悪くはないなど

文・高橋 将人

ある日、一本の電話が鳴った。「ブックインととりの実行委員会の方ですか・・・」

事務局の方からだった。小社が昨年刊行した城島徹著『私たち、みんな同じ』という国際理解教育の本が、第20回地方出版文化功労賞の奨励賞に内定したという知らせだった。今回は京都新聞出版センターから発刊された『織の四季 京の365日』との同時受賞だった。

そして「鳥取まで来ていただけますか」と、優しくお誘いいただいた。行くも行かぬもない、われわれ地方出版社を顕彰してくれる場は、年に一回、この賞だけなのである。精一杯の礼を述べて、電話を切った。嬉しかった。

それからまもなく鳥取から朝日新聞の支局長さんがわざわざ信州に取材にこられた。本番を前に、すでに紙面ではキャンペーンが開始されているのだという。20年の長きにわたってこの会を支えてきた関係者の、熱い心意気を感じた。

表彰式は10月27日、鳥取県立図書館で行われた。会場の一階では、すでに来年の選考対象となる800点の地方の本が、ぎっしりと並べられている。審査も始まっているらしい。

その二階で、小谷寛実行委員長より著者には表彰状が、版元には記念の盾が贈られた。滅多に褒められたことのない身には、まぶしい一瞬であった。

小さな県の、大きな応援

引き続き、今年は20回という大きな目標の到達点に達したこともあり、「拓け、地方文化の時代 地域の自立を求めて」と題して、記念の鼎談が行わ

れた。

壇上にはノンフィクション作家の山根一真氏と平井伸治鳥取県知事、地方・小出版流通センター社長の川上賢一氏の三者が登壇し、二時間にわたって「活字離れからの脱却」や「地方出版の現状と課題」などについて、会場からの質疑もまじえて熱心な討論が展開された。

そのなかで平井知事の、鳥取は人口60万人で全国で47番目ながら、県立図書館の本の購入額はいつも上位五番以内に入っている、という言葉が印象的だった。都市部でみれば

一市ほどの小さな県が、全国の地方出版社や執筆者の肩をたたいて励ましている。しかも公平性を欠くとして自県の出版物は常に選外にしているという徹底ぶりだ。

あとから本賞の選考過程の説明があったが、これがまた厳しい。

厳しい審査とボランティア

まずその一年に発刊された約800点の全国の本を集め、鳥取、米子、倉吉の三会場に展示し、訪れた市民の投票で選考対象を10冊前後に絞り込む。その候補作を12人の審査委員が10日ずつ預かり、熟読してレポートにまとめながら審査を進めていく。

きいてみると、段ボール箱に入れられた候補作が届いてからは、連日、朝から晩まで、食事をする間もないほど本読みに追われるという。なにしろ500頁を超える力作もあるのだ。その

間は家事も仕事も一切できないというのも、無理はない。

そうして審査員全員の回覧が終了したのち、再び議論を重ね、受賞作を決定していくのだという。

こんなしんどい作業を20年もボランティアで続けてこられたというのだから、驚異のほかはない。実行委員の方々の献身的な実行力とともに、今井書店グループの永井伸和会長や、詳述はできないが出版評論家の故小林一博先生、それから流通を支えてきた地方小の川上賢一社長などの尽力の賜物であろう。

小林先生と永井氏といえば、昔の光景を思い出す。20数年前のことで、当



第20回地方出版文化功労賞の奨励賞2作品



時先生は鳥取に現在のブックインの原型を模索されていたようだ。永井氏とは頻りに交流されていた。

あるとき、東京駅で小林先生と待ち合わせたのだが、

先生がホームに降り立つや、そのうしろから深々と頭を下げ、隣のホームの列車に乗り込む人物の姿があった。

あとで聞くとそれが永井氏だったようで、ホームを歩きながら先生はぼそりと言った。「彼はぼくを鳥取から送ってきてくれたんだ。それでこれから鳥取へ帰るわけさ。彼はそういう男なんだよ・・・」

今回鳥取に行き、実行委員会のひとたちのあたたかい歓迎ぶりを受けながら、ふとその光景を思い出していた。

帰りは鳥取と京都を結ぶ特急に乗った。本州を横断する線で、一度乗ってみたいと思っていた列車だ。記念の盾をバッグの底に大事に取めての、独り旅である。

車窓には昔ながらの家並みが広がり、その合間に現代的な設計の若者向けの建物が点在している。家々の庭先には葉の落ちた柿の木に橙色の実が紅く輝き、菊

の花やススキが風に揺れたりしている。ジョギングしている親子や、犬の散歩につきあっている姉妹。自転車で乗っている孫と、それを支えている老夫婦……。車窓のガラス越しではあるが、地域に生きる人々のほのぼのとした幸

福感が伝わってくるようだった。まったく先の見えない地方出版。今回の受賞の旅で、心細い行く末が拓けたわけではないが、地方出版でも少し頑張るのも悪くはないなど、自分の仕事を少し見直した。地域をこれ以上

空白にはいけないし、なによりもこうして多くの人たちから、背中を押してもらったのだから……。
(たかはし まさと／一草舎出版代表)
<http://homepage.mac.com/takashisa/issousya/index.html>

新刊ダイジェスト

※価格は総額（税込）表示です。

『写真集 草木塔』 ●やまがた草木塔ネットワーク事務局著



採石された状態のまま立てられたものもあれば、表面が研磨されたものもある。これら石塔の写真のどれを見ても『草木塔』あるいは『草木供養塔』と刻まれている。〈草木塔〉とは一体何だろう？それは、我々が生活に用いたり食したりする植物に感謝し、またその命を惜しみ、供養するための石碑だ。

食した動物のための供養塔は世界各地で見られ

るものの植物のための供養塔が見られるは日本だけであるという。しかもなぜか山形県の最上川流域に集中している。これらの写真を見ていると、犠牲を強いた自然への、かつての日本人の敬虔な態度を感じ取ることができる。

◆2000円・B4判・178頁・山形・山形大学出版会・2007/08刊・ISBN978-4-903966-03-8

『人為と自然 —三木清の思想的的研究』 ●津田雅夫



戦後世界を秩序づけてきたアメリカ自由主義や社会主義による構造がくずれ、日本独自の哲学を追究した西田幾太郎、田辺元、和辻哲郎、三木清、九鬼周造、戸坂潤らの思想が再び注目されている。そんな中で本書は、敗戦直後獄中死した三木清(1897-1945)の哲学の今日的意義を明らかにしようとする。

『歴史哲学』や未完に終わった『哲学的人間学』、

そして『構想力の論理』、『人生論ノート』をはじめとする三木の著作に即しながら、それらを詳細に分析し、自然、文化、人間といった意味のキーワードを軸にして、三木思想の核心に迫り、新しい三木像の構築を試みる。

◆3150円・四六判・333頁・京都・文理閣・2007/03刊・ISBN978-4-89259-540-0

『古代日光紀行 —二荒山碑の謎を追う』 ●下村衣文著



日光の名山男体山は今から約千二百年前に修行僧勝道上人によって開山された。このことは僧空海の書いた『性霊集』が伝えている。この記録を男体山(二荒山)に因んで『二荒山碑』と呼んでいる。それによると勝道上人は失敗を重ね苦勞のすえ登頂していることがわかる。本書はその足跡を忠実にたどるとともに、当時の時代背景やその意味を検証し、また著者なりに想像をめぐらした

ロマン豊かな物語である。古代日光の謎はさらに広がり、なかでも現在東照宮や輪王寺などがある山内といわれる地域の考証、男体山頂の発掘調査で出土した多くの遺跡にまつわる謎など興味を呼ぶ。なお巻末の資料『二荒山碑』の意訳分にはぜひ目を通しておきたい。

◆1470円・四六判・159頁・栃木・随想舎・2007/09刊・ISBN978-4-88748-159-6

『宗教としての芸術』 ●金子敏也著



大正2年、死の年にボストンで書いたオペラ「白狐」が、先ごろ東京芸大で初上演され話題を呼んだ。信太妻伝説を基に英語で書かれたこの作品は、日本文化と国際的視点が交差する天心ならではの作品である。天心が英語で著作を執筆し続けた動機は、欧米社会での知名度向上と、西洋人へのアジア文化の啓蒙のためであったとし、天心のアジア的ロマンに光を当てる。生前の言動には政治的

色彩は少なかつたにも拘わらず、昭和期にはアジア主義、国粹主義と政治思想粹組みで語られることが多く、天心像が歪められてしまった。日本近代化の歩みの中で、「明治社会が生んだ真の国際人」天心の実像を知る好著である。

◆3990円・A5判・498頁・東京・つなん出版・2007/09刊・ISBN978-4-901199-60-5

売行良好書

期間：2007年11月16日～12月15日

[出荷センター扱い] ※税込み価格

- (1) 『作っておくと、便利なおかず』 1260円・ベターホーム出版局
- (2) 『ひこねのよいにゃんこのおはなし』 1000円・サンライズ出版
- (3) 『医者、用水路を拓く』 1890円・石風社
- (4) 『機能不大家族』 1600円・アートヴィレッジ
- (5) 『子どもを生きれば おとなになれる』 2100円・アスクヒューマンケア
- (6) 『だから子どもの本が好き』 1680円・成文社
- (7) 『フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂版』 3570円・日本野鳥の会
- (8) 『あのCMの絵コンテ』 1260円・マドラ出版
- (9) 『どんぐりの図鑑 フィールド版』 1050円・トンボ出版
- (10) 『植民地時代の古本屋たち』 2100円・寿郎社
- (11) 『タミル語入門』 2310円・南船北馬舎
- (12) 『ゆりちかへ』 1365円・書肆侃侃房



[三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書] ※センター出荷データより/税込み価格

- (1) 『書肆アクセスという本屋があった』 1200円・右文書院
- (2) 『よみがえる滝山城』 735円・揺籃社
- (3) 『HB 02』 500円・HB編集室
- (4) 『きのこ11』 735円・日本キノコ協会
- (5) 『沖繩のうねり』 900円・琉球新聞社
- (6) 『高等学校 琉球・沖繩史』 1575円・編集工房東洋企画
- (7) 『北海道いい旅研究室10』 690円・海狗舎
- (8) 『信州グルメの達人になれる本 松本編』 945円・はじめの一步ぶっ工房
- (9) 『真田三代と信州上田』 840円・週刊上田新聞社
- (10) 『信濃高梨一族』 1890円・歴研

[ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書] ※センター出荷データより/税込み価格

- (1) 『広告批評 No. 321』 590円・マドラ出版
- (2) 『酒とつまみ 第10号』 400円・大竹編集企画事務所
- (3) 『おすすめ文庫王国2007年度版』 798円・本の雑誌社
- (4) 『本の雑誌 No. 295』 680円・本の雑誌社
- (5) 『本の雑誌 No. 294』 530円・本の雑誌社
- (6) 『東京かわら版 No. 407』 420円・東京かわら版
- (7) 『お江戸超低山さんぽ』 1365円・書肆侃侃房
- (8) 『鉄腕伝説 稲尾和久』 1000円・西日本新聞社
- (9) 『野宿野郎 5号』 500円・野宿野郎編集部
- (10) 『このマンガを読め! 2008』 680円・フリースタイル

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。

<http://www.bekkoame.ne.jp/~much/>

トピックス — ★★★

▼三省堂4F 地方小出版コーナー正式オープン

11月25日にプレオープンした三省堂書店神保町本店4Fの地方出版小出版コーナーが、書肆アクセス(11月17日に閉店)で使っていた什器類も使用して12月1日に正式オープンしました。右文書院刊『書肆アクセスという本屋があった—神保町すずらん通り1976-2007』(1200円)を中心にして、この本への寄稿者や関係者の出版物を集めたミニフェアが展開されています。

▼今月の気になる雑誌

お笑いコンビ「麒麟」の田村裕さんの自叙伝『ホームレス中学生』(ワニブックス)が最速ミリオンセラーとなって話題になりましたが、センター扱いの雑誌で、様々な依存症とその回復のための専門誌『Be!』(アスク・ヒューマン・ケア/840円)の最新89号にその田村裕さんのロングインタビューが掲載されています。これを読むと不思議と前向きな気分になります。なぜ『ホームレス中学生』が爆発的に売れているのかよくわかる気がします。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先(郵便番号、住所)、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。


◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。(メール便の到着は、発送してから3~4日かかります。)お急ぎの方、その他ご要望がございました場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。

◎なお書籍お買上総計(税抜き価格)が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。

★地方・小出版流通センター

FAX: 03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM ~ 8:00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

**営業の
ごあんない**

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

